

# 教師が学ぶ機会を大切に

福井県英語研究会副会長

田 中 佳 之

令和3年度も新型コロナウイルスに翻弄された1年でした。8月に新規感染者数がピークとなり、教育現場も本研究会の活動もその影響を受けたと言っていいでしょう。6月の英語研究会総会は書面による決議となり、8月に福井市で開催予定だった東海北陸公立学校研究大会も中止となりました。

しかし、そのような状況でも、中学校、高校の先生方が集まり、放送テストやリーディングテストの作成を始めとした本研究会の活動を行い、11月にはオンラインではありますが、福井県英語教育研究大会が開催されたことは、喜ばしいことです。

さて、学習指導要領の外国語科の目標にもあるとおり、「英語のコミュニケーション能力の育成」は、英語教育界の大きなテーマです。放送テストやリーディングテストも生徒の英語能力を測るためのものではありませんが、「英語のコミュニケーション能力の育成」のためにはどのような問題が適当なのかを、教師が学ぶ機会でもあります。本研究会の活動を通して、作成者の先生方は多くのものを得たことと思います。また、英語教育研究大会の講演から、参加された先生方は、評価を通して英語授業について考える機会にもなったことでしょう。

ただ、前述の通り、東海北陸公立学校研究大会が中止となりました。県内3つの中学校は、この大会に向けて実践を重ね、研究を進めてきました。近隣の中学校の協力も得ながら研究してきた学校もあります。その研究過程が教師にとっての学びであり、誌上ではありますが、他校に紹介できたことはよかったと思います。しかし、実際の英語の授業について、他県の先生方と議論を交わす場面は実現されませんでした。この機会に他県の情報を得て、本県の英語教育のレベルアップにつなげる機会を失ったことは残念です。

「英語のコミュニケーション能力の育成」のために、研鑽を積むことは英語科教員にとっての使命です。日々の授業に満足せず、研究を重ねることが大切です。他校の研究授業を参観し、その授業について議論すること、研究集会で実践発表を聞くこと、学識経験者の理論を聞くこと、我々英語科教員が学ぶ機会がたくさんあります。

今一度、英語によるコミュニケーションとは何か、授業においてコミュニケーションを目的として英語を使用させているか、限られた時間の中で効率的に活動させているかなど、自らの授業を振り返ることが大切です。

英語科教員として、学ぶ機会を大切にしたいと思っています。

# 変化の時代

福井県英語研究会副会長

磯野和之

コロナ禍の中、英語研究会のさまざまな活動においても多くの制約がかかります。行事ひとつを開催しようとしても、また問題作成のために集まろうとしても、感染症対策を徹底しながら試行錯誤で取り組まなければなりません。このような状況下での先生方のご苦労は、想像を絶するものであったろうと思います。逆境下にあっても、生徒の英語力向上のために多くの活動が本年も運営されてきました。先生方の努力には感謝の気持ちしかございません。本当にありがとうございました。

新たに、生徒一人ひとりにタブレット端末等が支給され、英語の授業そのものにも変化が生じた1年であったともいえるでしょう。緊急時のオンライン配信はもとより、さまざまなソフトウェアを活用した授業展開は、生徒たちの活動のみならず教員の発想にも多様性を与える結果となったのではないのでしょうか。2年前には想像すらしていなかったことです。(勿論、目指すゴールそのものに変化はありませんが。)

中学校では本年度より新学習指導要領が全学年で実施され、小学校で「教科」として英語を学んだ生徒たちが用いる新たな教科書が使用され始めました。そのレベルの高さ、内容の深さに、正直驚きを隠すことはできません。それら教科書の有効的な活用法、そしていかに生徒たちの英語力を育成していくのか。英語科教員の力の見せ所なのでしょう。さらに、高校では新教科書で学んだ生徒たちをいかに育てていくのかを考えていかねばなりません。中学校と英語が「教科」と位置づけられた小学校との連携というのもさまざまな場面で耳にする話であり、また小中高を見据えながら「福井県の生徒」を育てていくという観点では、看過できない問題だと思われます。しかしながら、実際に英研活動をどのように小学校の先生方に紹介していくのかということは大きな課題であり、今後おおいに議論を要することとなるでしょう。

また、高校においては令和4年度より新学習指導要領が学年進行で実施されます。観点別評価がいよいよ導入されます。「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」の3つの資質・能力について到達度に応じて「指導と評価の一体化」を目指していくことになります。中学校の現場からすれば、以前からやっていた当然のことと思われるでしょうが、高校においてはこの評価観点が導入されるということに戸惑われている先生方が多少なりともいらっしゃるのが現実です。ただ、幸いなことに高校英語科としては、これまでに音読・スピーチ・ペアワーク・グループワーク・ディスカッション・ディベートのような活動や、それに付随するパフォーマンステストはすでに導入していた学校がほとんどであり、実際の評価にも組み込んできました。それをしっかりとした評価基準として形にすればよいわけであり、

他の教科・科目と比較すれば英語科は随分と進んでいると言えます。ただ、「主体的に学習に取り組む態度」については、中学・高校ともにまだまだ研究の余地はありそうです。

いずれにせよ、やはり英語の教育現場での変化は多様性にあふれており、我々教員にはこれまで以上に柔軟性が求められています。その多様性の波に上手に乗るための多くの Tips を与えてくれるのが英研の活動であると信じて疑いません。

